

RYONAMON QUEST RG2018-2019をご購入頂いた皆様へ

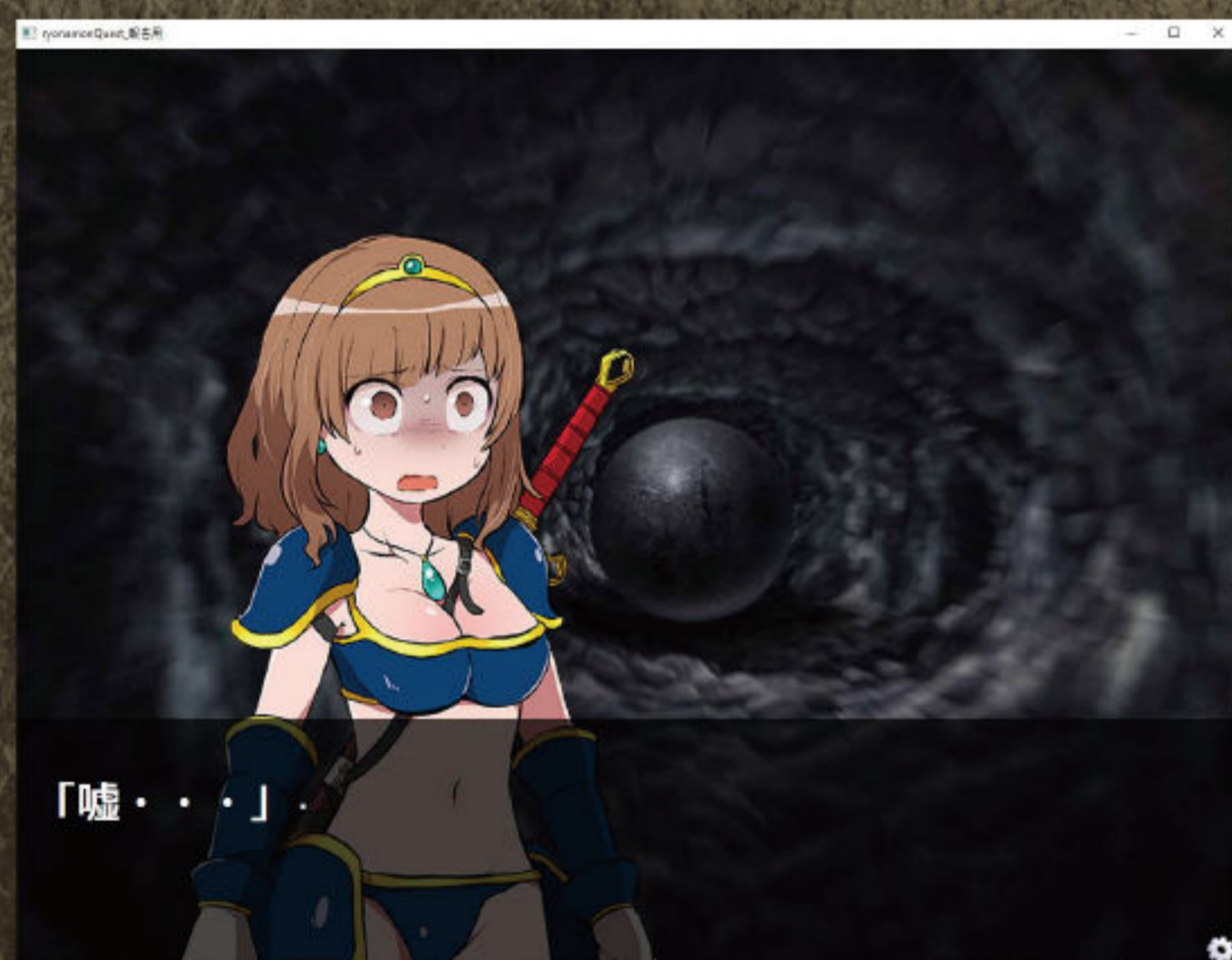
この度は本CG集をご購入いただき、誠にありがとうございます。この作品は、現在制作中のビジュアルノベル「リョナモンクエスト～勇者が勝つとは限らない！？～」に収録されるイベントCGとして制作されたイラストを、2つのバージョンに分けてまとめたものです。

2017年から本格的に制作活動を開始した本作は、発売延期を決定する度に大型のアップデートを重ねてきましたが、本CG集では、本来2018年・2019年に発売予定だった製品の内容を、ゲームの完成に先駆けて先行公開する形で発行する運びとなりました。

「世界一グロいビジュアルノベル」を謳って制作を開始した本作ですが、お陰様で現在では大変多くの方に作品を応援していただいております。Twitterで公開している状態変化や丸呑みから作品を知っていただいた方も多いため、そういった方々にも配慮し[H-side]では状態変化や丸呑みといったソフトリョナ表現を中心に、[G-side]ではグロテスクなシーンを中心に振り分けました。※ただしどちらにも軽度のスカトロ表現は含まれます。

実際のゲームとはシナリオや演出が異なる本作限定の表現も多く盛り込まれており、このCG集自体で一つの作品として楽しんでいただけるように全身全霊を込めて制作しました。添えられたテキストにはストーリーを理解する為のキーワードがふんだんに盛り込まれていますので、これもリョナモンクエストという作品の一つの形として楽しみいただければ幸いです。

【2017-2018年】-プロジェクト本格始動-



当時の制作画面。立ち絵はLive2Dではなく、一枚絵でした。

それから、趣味で制作してTwitterで公開したエロくもグロくもない詐欺的PVがキッカケとなり、まいちゃん・デスパンダ・シーエちゃんといった魅力的なキャラクター達とコラボさせていただけることが決定。名だたるコラボキャラ達に恥じぬよう、一旦作品の規模を見直すことになったリョナクエは、作品リリース日を見直し、大きく生まれ変わるようになります。

制作がスタートした当初は、実はイベントシーンを動画化する予定はありませんでした。作品に登場人物は[勇者]と[魔王]のみ。それ以外はモンスターだけで、物語の舞台も[洞窟]内だけで完結するというとてもコンパクトな作品だったのです。

イベントシーンを動画化するというアイデアも制作途中で決まり、以後の発注データは全て細かくレイヤー分けされた動画前提の構造となっていくます。

ちなみに、この頃からはまだ制作環境も一般的なミドルスペックPC1台でした。



こちらがそのPV。Youtubeと公式サイトにて公開中。

【2018-2019年】-Live2Dの採用と動画表現の強化-

新規キャラ[カシス]の登場や新モンスター[サイクロプス][タランチュラ]の追加に加え、立ち絵にLive2Dを採用することが正式決定。予算も一気に増幅して外伝[シーエ編]の制作と、氏賀Y太先生の作品内でお馴染みの殺戮シーンをリョナモンクエストアレンジバージョンとして収録することも決まり、作品として大幅な進化を迎えます。更に、取り扱うジャンルに関しても、ほぼグロリョナのみだったものから[状態変化][丸呑み][恥辱・屈辱][洗脳・乗っ取り]といったソフトリョナまで幅広く対応することで収録シチュエーションも一気に拡大。同時に、動画制作を前提に発注した細かいレイヤー分けが施された原画を元に、



2019年版ではLive2Dの採用と、フェイスUIを追加しビジュアルを強化。また、PC環境も動画制作に耐えうるためにプロ仕様のスペックを導入。編集用と書き出し用の2台体制で制作を続けています。

最長4分を超える死亡エンドアニメーションを制作するなど、フルボイス&アニメーションによる死亡エンドを作品の軸として制作を進めてゆくことになりました。この頃から、コラボ作家様の作風を最大限活かす為、漫画形式でイラストをコマに割って動かす試みも開始しました。

【2019-2020年】-これからのリョナモンクエスト-

そして今、リョナモンクエストは未公表含め新たに合計の13名の女性キャラに加え、冒険者達や舞台となる大陸に王国・騎士団・冒険者ギルドといった世界観の設定も拡張。更にそれぞれのリョナのジャンルの最前線で活躍するイラストレーター/漫画家様に、自身の最も得意とするリョナジャンルで自由に描き、作品にCGを提供していただくコラボ形式を新たな軸として、一つでも多くの「続きが観たかったあのリョナシチュエーション」を実現するために、2020年末の発売を目指して日々制作を続けています。

リョナ(リョナニー)とはとても奥深いもの。

リョナの解釈は人それぞれ。リョナモンクエストは決してリョナというジャンルを代表するつもりで作品を制作してはおりません。なぜなら、一つの作品で全ての人の好みのリョナに答えることは絶対に不可能だと理解しているからです。

リョナラボがこの作品を通じて実現したいこと。それは、これまでに無かった・見たかった普通のゲームや漫画ならカットされてしまうであろう「その先」を追求し、採算を度外視してでも一人でも多くの人に楽しんでもらえるようにリョナを実現する作品を提供することです。

専業ではないからこそ、完全に趣味としてお金を掛けて制作できる強みを活かし、これからもニッチ過ぎてリョナクエでしか見られないようなリョナを追求してゆきたいと思っていますので、引き続き応援と温かいご支援の程、宜しくお願い致します。

プロローグ



「ほう、早いではないか。美味そうな肉を食い損ねたぞ」
 ——不安は的中していた。レオナが遺跡跡へ到着すると、そこには気を失った愛娘と魔王の姿があった。娘の命が惜しくば、その聖剣を渡せ。それが魔王の要求であった。

魔王にとって、勇者の血筋と同様に、この退魔の力を宿した聖剣もまた消し去りたい存在であった。愛する娘の命を守るため、要求に従いレオナが聖剣を差し出すと、魔王はニヤリと微笑みを浮かべ、横たわるリヨナに向けて魔法を放つ。

「だめえええ!!」
 丸腰のままレオナは駆け出すと、リヨナの盾になるように魔王との間に立ち塞がった。その次の瞬間、無慈悲にも、魔王の放った魔法の刃がレオナの身体を切り刻む。

——ごめんね、リヨナ……お母さん、一緒に居てあげられなくて——
 娘の命と引換えに、バラバラになったレオナが空中で四散し、その魂が天へと昇るその刹那、リヨナが胸にかけたネックレスが淡い光を放つのだった。



リヨナ

うん！リヨナ、いい子にして待ってるからね！

「遠くへいつちゃだめよ、リヨナ」
 「はーい、お母さん！」

一組の親子が村外れの遺跡跡で仲睦まじく過ごしていた。母親の名はレオナ。勇者の子孫として、代々封印の祠を守る「守り人」の役を担い暮らす彼女は、夫を病で亡くして以来一人娘のリヨナと二人、慎ましくも幸せな日々を過ごしていた。

しかし近年、二人の暮らすこのグロテスタ大陸では、以前よりも魔物の活動が活発化しており、王都——フェイタリティア王国——の騎士団の間でも、これを魔王復活の兆候ではないかと危惧する声上がり、警戒を強めているという。もちろん、その話はレオナの耳にも届いていたが、まさか百年以上も前に封印された古の魔王が、本当に復活するとだろうかとは、誰も本心では思っていなかったのだが……

突然の大きな爆発音に、レオナは周囲を警戒し見回した。どうやら煙は村の方角から上がっているようだ。驚き泣きつきリヨナを抱きしめると、レオナは自分が迎えに来るまで隠れているように言いつけ、幼い娘を一人残し村へと向かうのだった。

レオナが到着した時、既に村は悲惨な状況だった。大勢の魔物が押し寄せ、火を放ち、多くの村人が虐殺されていたのだ。

——一体だれがこんなことを……！ レオナが武器を構えると視界を塞ぐ煙の先から聞き慣れない声が彼女に語りかけた。

「待ちわびたぞ。貴様が近台の勇者か？」

「あなたは……まさか!？」

見れない女性——しかし、頭からは角を生やし、何より尋常ではない殺気と魔力を放っている。明らかにただの人間ではない。

——魔族だ。それも、とびきり上級の……

村を襲った女の正体、それは古の封印より復活を果たした魔王その人だった。長きに渡る封印の間に、少しずつ力を蓄えていた魔王は、人知れず復活を果たしていた。魔王は、かつて自分を封印した憎き勇者の血筋を根絶やしにするため、レオナの暮らすこのホフラレ村を襲い、近代の勇者を誘き出そうと目論んでいたのだ。

二人の戦いは熾烈を極めた。長い封印から目覚めたばかりとは言え、魔王の力は非常に強大であった。それでもかろうじて善戦するレオナだったが、娘の存在を臭いで嗅ぎつけた魔王は、意味深な言葉を残し彼女の前から姿を消してしまう。

「まさか……!？」
 最悪な予感が当たらないことを願いつつ、レオナは全力娘の元へと走るのだった。

「ほう、早いではないか。美味そうな肉を食い損ねたぞ」
 ——不安は的中していた。レオナが遺跡跡へ到着すると、そこには気を失った愛娘と魔王の姿があった。娘の命が惜しくば、その聖剣を渡せ。それが魔王の要求であった。

魔王にとって、勇者の血筋と同様に、この退魔の力を宿した聖剣もまた消し去りたい存在であった。愛する娘の命を守るため、要求に従いレオナが聖剣を差し出すと、魔王はニヤリと微笑みを浮かべ、横たわるリヨナに向けて魔法を放つ。

「だめえええ!!」

丸腰のままレオナは駆け出すと、リヨナの盾になるように魔王との間に立ち塞がった。その次の瞬間、無慈悲にも、魔王の放った魔法の刃がレオナの身体を切り刻む。

——ごめんね、リヨナ……お母さん、一緒に居てあげられなくて——

娘の命と引換えに、バラバラになったレオナが空中で四散し、その魂が天へと昇るその刹那、リヨナが胸にかけたネックレスが淡い光を放つのだった。





そうしてどれだけの時間が経っただろうか。

幼い彼女にとっては、とても長い時間に感じられたが、実際は一瞬の出来事だったのかもしれない。

「ほう……ようやく目覚めおったか」

聞きなれない声に気付き、リヨナが後ろを振り向くと、見たことのない赤い髪の女が立っていた。

「おねえさん、だあれ？」

リヨナはそう口にした直後、その女が手にしていた剣を目にし、言葉を失う。それは、紛れもなく大好きな母の聖剣だった。

「どうして、あなたがおかあさんのけん、もってるの……？」

疑問の言葉を口したリヨナだったが、既に彼女は全てを理解していた。

「この女が、母を殺したのだ。殺して、大切な剣までも奪ったのだと。」

気が付けばリヨナの身体は、魔王の元へ駆け出していた。戦う力など微塵も持ち合わせていない幼い身体で——リヨナの頭にはもう、母の剣を取り戻すこと以外何も浮かんでいなかった。

「かえ……せ……」

「なんだ、貴様、人間の餓鬼の分際で、何が出来る……！」

「かえせ……おかあさんの剣を、かえせえええ!!」

「うわあああ!!」

リヨナは母の聖剣を握る魔王の腕にしがみつく、全身全霊を込めて叫んだ。すると、彼女のネックレスと聖剣が共鳴を始め、彼女の身体をまばゆい光を取り囲み始める。

「な、なんだこれは！ うぐああああ!!」

やがて光は閃光となって辺り一体を包み込み、光を浴びた魔物たちが叫び声をあげて消滅していった。それは、レオナの命が消滅したその瞬間、リヨナの魂へと受け継がれた勇者の力が、ペンダントを通じて聖剣と共鳴し、幼き少女が勇者として覚醒した証なのであった。

リヨナが息苦しさに目を覚まし、立ち上がって辺りを見回すと、自分が生まれ育った村の様子は一変していた。

建物は焼き払われ、所々に動かなくなった村人たちが転がっているのだ。血生臭さと獣を焼いたような臭いが入り混じり、辺りには目も開けられないほどに熱気が充満していた。

「おかあ……さん？」

自分の周りに大好きな母がいないことに気付いたリヨナは、不安に駆られて何度も母を呼んだ。しかし、轟轟と燃え盛る炎と風音にかき消され、か細いリヨナの声は誰にも届かない。

もっとも、その声が例えどれだけ大きかろうと、もう母に届くことはないであつたが——

——リヨナはふと、目の前に自分の身の丈の数倍もある、高い杭が数本聳え立っていることに気が付いた。無意識のうちに視線を上の方へ送ると、そこには信じられない光景が広がっていたのだ……

「おかあ……さ……ん？」

杭の先端には、自分の大好きな母が、刺さっていた。引張りすぎて千切れてしまったお人形のように、手と足がバラバラになつて。

いつもの穏やかで優しい顔とは違う、見たこともないとても怖い顔をして、そこに居たのだ。——おかあさんどうしたの？ どうしてそんな高いところにいるの？ どうしてへんじしてくれないの？ こわいお顔はやめてね。リヨナ、笑ってるお母さんのお顔が見たいよ。

いくら幼いリヨナといえ、命が尽きるということに関しては、なんとなく理解をしていた。でも今、彼女はそれを決して認めたくはなかったのだ。——そんな高いところにいるので、早くおりてきて。リヨナ、少しつかれちゃったよ。ぎゅっとして欲しいな——そんな二度と母には届くことのない言葉を一人呟くりヨナの瞳からは、ぼろぼろと大粒の涙が幾度となく零れ落ちていた



リヨナ

お母さんの剣、返せえええ!!!

うわああああ!!!



その時のことを、リヨナはあまり覚えていない。目覚めた時、彼女は焼け残った民家のベッドに寝かされていたのだ。

生き延びた村人がリヨナの姿を見つけた時、彼女は母の聖剣を強く握りしめたまま、気を失っていたらしい。

リヨナの運命を変えたあの日、その場に残されていたのはほとんど焼け落ちてしまった村と、わずかに生きのこった村人。そして魔物達の死体だけだった。魔王も、勇者だったリヨナの母もみな消えてしまったのだ。

それから十数年。村人達に育てられたリヨナは、祠の守り人として働きながら日々鍛錬を重ねてきた。騎士団士官学校での修行も終え、魔物との実戦も重ねて一人前の魔法剣士になったリヨナは、勇者として無事に成長を遂げたのだ。

——母を奪い、村の皆を殺した魔王を絶対に許さない。

あの日から、魔物達はずっと、影を潜めていたのだけれど……最近、再び魔物たちの動きが活発化しているという噂が耳に入った。その原因は、かつてホフレ村を襲撃し、敗走した魔王が再び力を蓄え始めているからではないか——そんな話を騎士団長のセシリアから聞きつけたリヨナは、いてもたってもいられずに、気がつけば旅支度を始めていた。

まずは王都に向いて騎士団からより詳細な情報を得よう。あの日の非力な自分とは違う。今の自分なら、きつと魔王を打つ倒せるはずだ。

「気を付けるんだよ、リヨナ」

「頑張れよ！リヨナ……いや、勇者様！」

自分を育ててくれた村人たちの声援に、リヨナは大きく手を振り答える。

「まかせてよね！魔王なんて、あたしがぶっ倒してやるんだから！」

生まれ育った故郷、ホフレ村を旅立った勇者リヨナに、この先一体どんな過酷な運命が待ち受けているのだろうか。それをまだ、誰にもわからない。

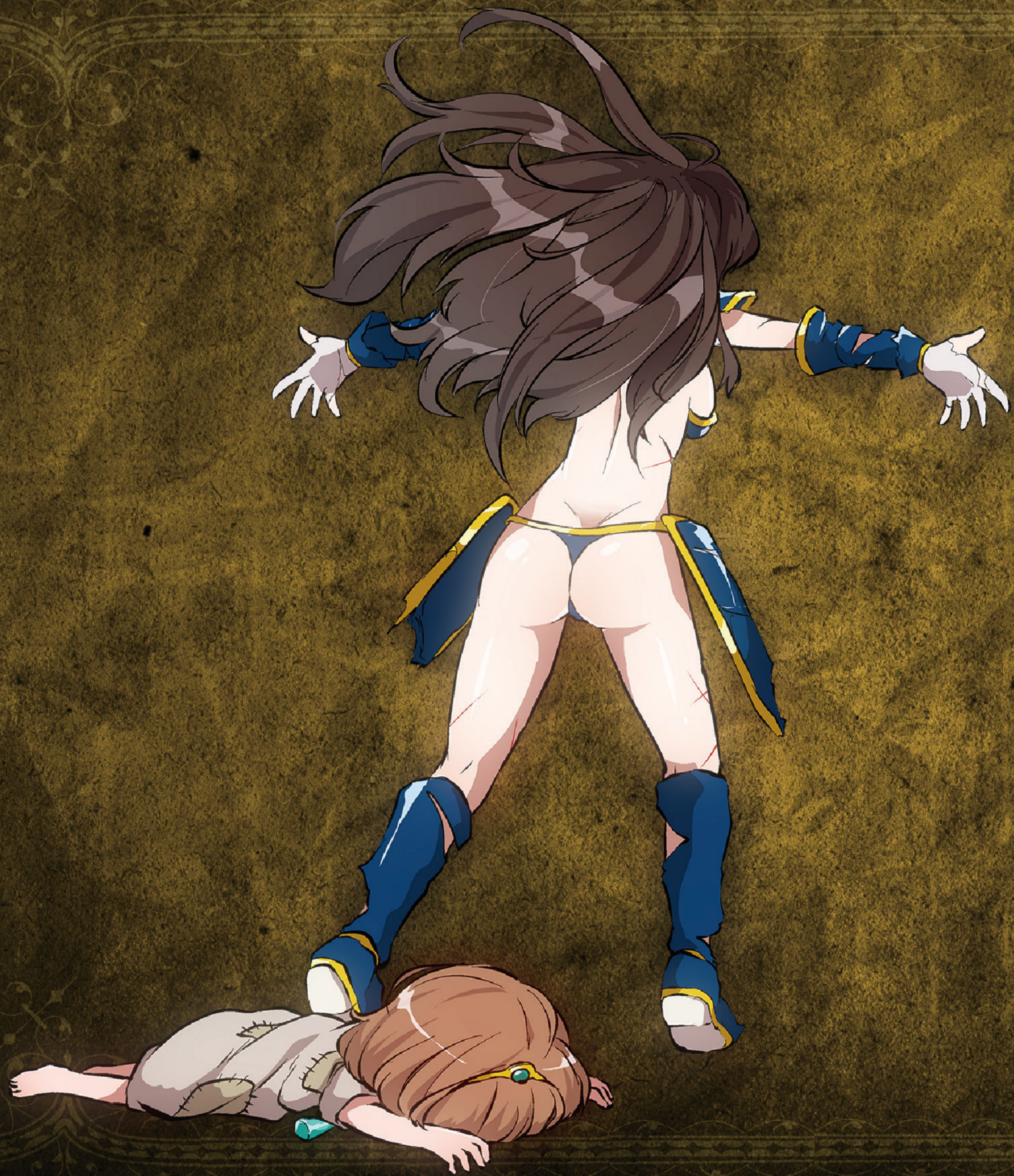
「待ってなさい、魔王！それに……見ていてね、お母さん」

大いなる決意を胸に、リヨナの大冒険が今始まろうとしていた。

RYONAMON QUEST

～勇者が勝つとは限らない～









リヨナモンククエスト前日譚

士官学校生での日々

「そこにいたのか、リヨナ」

あたしの大切な昼寝の時間を妨げた声の主は、生真面目な学友だった。

「なによ……あたしはもう午後の教務は終わらせたんだから、どこで何してようといじやないのよ」

午後の教務——士官学校の午後の予定に配置された、実務訓練のことだ。学生同士で勝ち上がり戦を行い、勝ち抜いた者から抜けてゆく。そんな競争性の高い訓練において、あたしは連戦連勝でさっさと勝ち上がり、勝者の権利として隊舎裏の木陰で惰眠を貪っていたのだ。

「いい加減にしろ、これで何度目だ！ 先に勝ち上がったものは勝てない者の動きを見てやって、指導するのが努めだろう！」

そういつて口煩くしている彼女の名はセシリア。優秀だった女王様の侍女の遺児で、女王自らの推薦を賜りこの士官学校へ入学したという才女だ。悔しいけど、この学年で今のあたしに唯一黒星をつけたのは、男連中を凌いでこの娘だけ。——いくなれば、あたしの『好敵手』ってところかしら。

「あたし人に教えるのって、苦手なのよねえ……身体が勝手に動くっていうか、生まれ持ったの才能ってやつ？」

実際、あたしはこれまで剣を手にして『重たい』と感じたことなんて一度もなかった。いわゆる『魔法剣士』と呼ばれる戦士たちは、自らの腕に魔力を込めることで、重たい鉄や銅の剣を軽々と振り回すことができるようになるという。しかし、あたしの場合は何も意識しなくてもそれが発動しているようで、初めて武器を手にした時から、軽どんな武器も容易く扱えてしまうのだ。

「確かにお前の才能は素晴らしい。その剣技は亡くなられた母上の生き写しのようにだと分隊長殿も仰っているが……」

声のトーンを落として、セシリアがあたしに問いかける

「お前はそれで満足なのか？」

「満足かって……一体なにがよ？」

「お前は母上の仇を打つため、剣技を磨くためにここに来たのだろう？ そのためにはまず母上を超えねば、魔王へ勝利することなどありえない。他人に教えられないということは、お前はまだ自らの剣技を理解していないということだ。——」

「あーもう、わかったわよ！ 今行くから、お説教は勘弁してよね」

「……そうか。では共に戻ろう。勇者の血を引く者として、みんなお前に期待しているのだ。強い憧れを抱いている者もいる。どうか彼らにももっと歩み寄ってやってほしい。同じ釜の飯を食う、仲間ではないか」

相変わらずこうして真正面から正論をぶつけてくる……

真面目で実直で、あたしは正直いってこの娘が少し苦手だった。幼い頃から村人の助けを借りて独自に剣技を磨き、村に近寄る魔物を狩ってきたあたしにとって、士官学校なんて適当にやり過ぎて卒業してしまうつもりだったのに……

——フェイタリティア王国騎士団士官学校。王国によって設立され、同じく王立の魔導研究所と隣接するこの学校は、大陸随一といわれる魔導研究の成果を教育に活かすべく、武道のみならず魔導の教育にも熱を注ぐ騎士育成の名門だ。大陸中の魔法剣士を志す者たちが一同にあるまるこの学舎に、十五になったあたしは籍していた。生まれ育ったホフラレ村には『あの事件』以来、有能な魔道士の家系はみな途絶えてしまっていたため、村で魔術を学ぶことができずにいたあたしもまた女王様直々の推薦で、こうして剣技と魔導を学ぶことになったのだけれど——入学して直ぐの実力調査も兼ねた模擬戦闘において、バタバタと同期の学生達をなぎ倒してゆくあたしの前に、唯一最後まで立ちはだかったのが、このセシリアだった。

——まさかあたしが、出鼻を挫かれることになるとは——

「まったく。あんたとはほんと……やりづらいわ」

「そうか？ わたしはお前のことを尊敬しているし、お前もまた私の技量を認めてくれているのだろうか？ それならば私達はもはや互いを認めあつた存在ではないか」

どこまでも実直なセシリアの話しを受け流しつつ訓練場へと歩みを進めるあたしを呼び止める声が、突如として訓練場の端から響き渡った。

「勇者さま……！」

「げ、姫様……」

訓練場に似つかわしくない黄色い声を響かせた声の主は、マリーだった。



——マリアンヌ・フォン・フェイタリティア王女殿下。この国の将来を担う、幼き第一王女様だ。

マリィは小走りに訓練場の端からあたしの元までやってくる、纏わりつくようにあたしの懐に飛び込んできた。

「マリィ、あんたまた見学に来たの？ 王女様ってのは、ほんと暇でいいわね」

「おまえ、控除殿下に対してその態度、いい加減に……！」

セシリアや周りの従者たちが血相を変える中、等の本人はのほほんとした様子で目を輝かせ、嬉々としてあたしに話しかける。

「勇者様、今日もお麗しゅう……一体どちらに行っていていらしたの？ 私、勇者様の勇姿をひと目見ようと、午後のお勉強の時間を抜け出して来ましてよ！」

呆れた視線を従者へ投げると、従者もまた諦めたように深くため息をついた。

マリィは本来第二王女であり、その上には第一王女である姉がいた。しかし、マリィの物心つかないうちに病気で亡くなってしまったその第一王女に変わり、時期女王として母の愛情を一身に背負って育てられた彼女は、存分に甘やかされ、自由奔放に今を生きていた。

「悪いけど、もうあたしの試合はもう終わったのよね」

「そんな、せっかくここまで参りましたのに……そうですわ！ セシリア、あなた者様ともう一戦いかが？」

「もう一戦いかがって、あんた……」

——勘弁して頂戴。あたしは呆れた声を上げる。

突然の王女殿下の申し出に、流石のセシリアも泡を食って説得を試みた。

「殿下——」

「マリィとお呼びなさい！ セシリア」

「……マリィ、殿下。これは教務なのです。試合組みも既に決められており、現在は負けた者たちが勝ち残りをつけて真剣に勝負をしております。この一試合一試合が彼にとっては非情に貴重な経験であり、そして教官たちにとっても学生たちの実力を見極める……」

「勇者様……セシリアがまた難しいことをしております……」

年端も行かない幼い姫君相手に、いつもの調子で公明正大を貫くセシリアを前にして、マリィはあたしに助け舟を求めきた。

「とにかく、今日はもうお終いつてことよ。模擬戦なら定期的に教務に組み込まれているから、また観にいらつしやいな」

「わかりましたわ……」

不貞腐れた様子のマリィをなだめると、あたしは逃げるように再び訓練場へと歩きだす。どういうわけかこのお姫様はあたしに憧れているらしく、日頃から子犬のように懐いてはこうして城を抜け出し、周りの従者たちを困らせているのだ。

（さて、リヨナ！）

慌てながらも洗練された挙動で最上位の敬礼をマリィに送ったセシリアが、足早にリヨナの後を追いかけてくる。

「セシリアは、どうしてこうもお城の外では堅苦しいのでしょうか。わたくしのお部屋に遊びに来てくださるときは、もつと温くて優しく素敵なお姉さまですのに……」

去り際にマリィが何かこぼしているようだったが、それどころじゃないあたしはついでにセシリアも振り切るように、そそくさと訓練場の人混みに身を紛らわすのだった。

午後の教務が終わると、食事と入浴を済ませたあたしは居室で魔導書を片手に悪銭苦闘していた。幼い記憶の中で、優秀な魔法剣士として自在に魔法を操っていたお母さん。あたしにも魔導の才能はあるみたいだけど、いかんせんどうにも学業。つてものが苦手だった。

正しく体内の魔力を魔法として変換するためには、正確に呪文を詠唱する必要がある。その長つたらしい呪文を覚えるだけでも一苦労だつていうのに、呪文式の法則やら魔方陣の構成やら、ここでは学ばないといけないことが多すぎる。大体、魔方陣なんて描けるようになってなんになるっていいのか。

そんな愚痴をいつも笑って聞き流しては、くどくどと、なぜ魔方陣の構成を知る必要があるか、それがどう実践で役立つかを説いてくるのが同室のセシリアだった。あたしたちの部屋は四人部屋になっていて、セシリアの他にも二人の士官候補生と共同生活を送っているのだ。

「そういえば、リヨナ。お前は隣の魔導研究所に在籍している天才魔道士の噂を知っているか？」

「知らないけど、それがどうかしたの？」

「なんでも、その男は魔導研究所内に併設された魔導学院を主席で卒業し、若くして筆頭研究員となり様々な魔導の研究を行っているらしい」

「そりゃ魔導の研究をするでしょう。そういうところなんだから。」

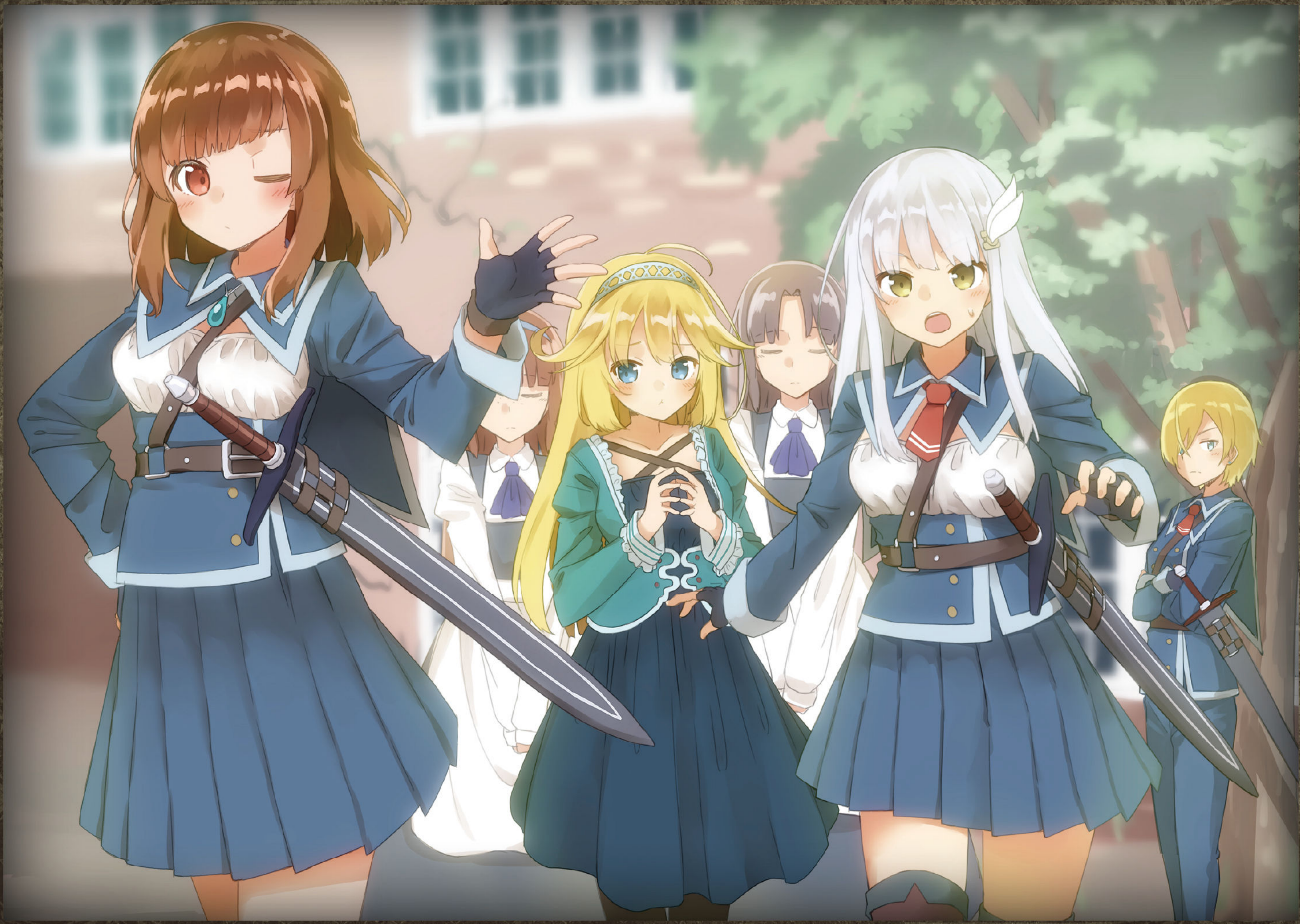
「そうやって話の腰を折るな。私がいいたいののは、どうやらその男の妹が、史上最年少で魔導学院へ入学することが決まったらしいのだ。まさか兄をも凌ぐ勢いとは。流石ゴア家の御家柄といったところか」

「ゴア家？ そんな貴族の家名、聞いたことないけど……」

「無理もない。ゴア家は世間一般へ知れるほどに名を馳せた名家ではないからな。しかし、その実は、歴代優秀な魔道士を輩出する家系で、これまで陰ながら我が国の魔導研究の発展に大いに貢献してきたのだ」

——これはまずい、また固い話が続きそうだ。なんとか話題を変えないと——そう思ったあたしは、適当な話題を話を逸らそうと試みる。

「その……妹ってのは、可愛いのか？」



「さあ、どうだろう。私もその容姿までは把握していない。しかし聞いた話しによると、美しいブロンドの長髪に、透き通るような肌をしたまるで人形の様な令嬢だと専らの評判だそうだ」

「へえ……」

「なにせ、その兄というのも、なかなかの伊達男だと聞く。寡黙で多くは語らないところがまた良いのだと、魔導学院で同期だったという私の友人が熱く語っていた」

「魔導の研究に、容姿は関係ないでしょうよ」

そんな他愛のない話題で盛り上がる二人の会話に、聞き慣れない声が割り込んだ。

「……お前たち、掃除の当番はどうした」

——ミラージュ。眉目秀麗という言葉がこれほど似合う男は他にいない。細い体躯に甘い顔で、これまで多くの女生徒から関係を迫られて来たらしいが、その全てをにべもなく断っているという奇特な男だ。その上、ミラージュという名前以外の殆が謎に包まれており、本人も自身のことを一切語ろうとしないため、そもそもどうやって入学してきたのかすらも怪しい人物なのだった。とりあえず、あたしの中では、汗臭い同期の男たちと比べてやたらと、いい匂いがするやつ。って程度の認識でしかないのだけれど……

「す、すまない。今すぐに行く！ ほらリヨナ、清掃の時間だ！ 急げ！」

話し込んでしまったことで、定時に行われる掃除の時間を過ぎてしまった事實は、セシリアにとって手痛い失態だったようだ。自分に割り振られた清掃当番をサボるなど、彼女にとっては言語道断なのであろう。ましてはそれを他人に指摘されるなんて。

珍しく慌てふためくと、——先に行く！ そう言い残し、リヨナを追って足早に部屋を飛び出していったのだった。

「……リヨナと言ったな」

渋谷部屋を出ようと机を離れ扉に向かうあたしを、ミラージュが不意に引き止めた。——彼の声を聞いたのはこれが初めてかもしれない。それは、感情の籠もっていない、けれど少年のように透き通る綺麗な声だった。

「教団には気を付けろ」

「教団って……あのロッテン教団のこと？ 国教の……」

ミラージュはそれだけ言うと、あたしの問いには何も返さず、静かに去っていった。

——ロッテン教団。かつてこの大陸を救った勇者の伝承を教えるとする大陸最大の宗派で、この大陸に住む殆どの人が入信している——あたしも勇者の末裔として、士官学校に入学する前に一度顔見せとして教祖様と謁見したけれど……。気を付けろ。って一体どういうことかなのしら？ 多くを語らないという噂通りに、大事なことは何も伝えずに去っていったミラージュとは結局その後、士官学校を修業するまでの間に再びその話しをすることはなかったのだった。

無事に魔法も習得し、士官学校での課程を全て修業したあたしは、晴れて魔法剣士としての資格を取得した。とは言え、国に認めて貰えなかったって魔法剣士は名乗れるのだけれど……。国家資格があればギルドの登録や武具の購入時などに何かと融通が聞いて便利なのだ。

勇者の末裔とは言っても、何かを成し遂げない限りはあたしはまだ、勇者。ではない。マリーのようにあたしのことを勇者と呼んでくれる人も中にはいるけれど、それはあくまで勇者の血を引く者への、期待と羨望の表れなのだ。

本来、士官学校を出た者はそのまま騎士として王国騎士団へ入団するのが通例だけど、あたしには勇者の末裔として封印の祠の周辺を守る仕事があるから、また暫くは村に戻って修行を続けることになる。一方で、主席で卒業したセシリアはそのまま騎士団の将校育成課程へと進むのだそうだ。その道は、選ばれしエリートのみが進む狭き門であるけれど、将校になる将来が約束された誰もが羨望する道だ。しかし、学校を出てからまた学校に通うなんて、あたしには信じられない。そんなのは、絶対に御免だ。

ミラージュは修業まで在学していたの確かだけれど、その後の行く末は誰も知らないらしい。あいつは結局、最後まで謎の男だったわね。

そう言えば、いつかセシリアが噂していた天才魔道士の妹が、魔導学院を早期で卒業して兄と同じく魔導研究所に配属されたって話は、流石にあたしの耳にも直に届いていた。——期待の新星、カシス・ゴア。天才魔道士ゴア兄妹が、この国の魔導研究の未来を切り開く——そんな見出しの書簡新聞を、嫌という程見かけていたのだから。

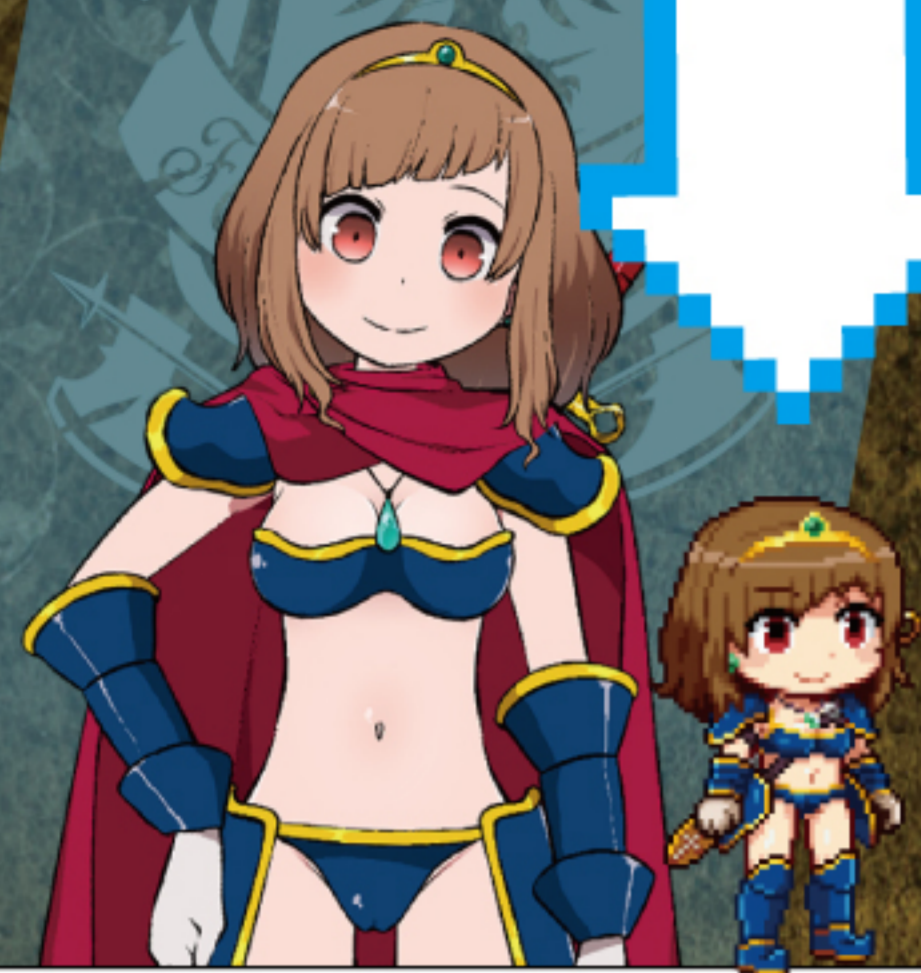
それと……信じがたいことに、あのマリーが士官学校に飛び級で入学するらしい。流石にもう剣は振れる程度の年齢にはなったようだけど、いくらなんでも早すぎるのでは……。おおかた、一日も早く騎士になるんです！。なんていつもの我儘を通したのだろうけれど、あたしと同じ時期に在籍できなかったことを永遠嘆いていると、セシリアから聞かされたのだった。流石に、勇者様、もう一度入学致しませんこと？。とは言っていないあたり、あの娘も人として成長したのかもしれないけれど。

それから数年後、ついに魔王討伐へと向かうことになるあたしの前に、この時のメンバーが勢揃いすることになるのだけれど、当時の私は想像もしていなかったのだった。セシリアがあまりに若くして騎士団長を任されることになったのには驚いたけど、それ以上に、あの後直ぐにミラージュが女王直属の近衛騎士の位を拝命していたなんて……。そりゃ隠し事が多いわけだ。マリーはマリーで、今では特別士官として部隊を一つ任されているみたいだけど、影で、姫騎士部隊。なんて囃されるらしい……。まあ、あの娘は相変わらずだ。とにかく、みんな元気にやっているみたいで、それがなによりだわ。

Choose
your character

Player 1

Player 2



Riyona -リヨナ-

職業：勇者
特技：剣術・黒魔法

伝説の勇者の末裔で、剣と魔法で戦う魔法剣士。幼い頃に母を亡くしている。本作の主人公。



Cecilia -セシリア-

職業：魔法騎士
特技：槍術・白魔法

若くして王国騎士団長を務める。魔法騎士としては超一流の腕前だが、その出生に秘密あり。



Marie -マリー-

職業：魔法騎士
特技：剣術・白魔法

王国の第一王女。騎士に憧れ、自らも部隊を率いてはいるが、実戦経験はまだ殆どないルーキー。



Mirage -ミラージュ-

職業：近衛騎士
特技：剣術・闇魔法

女王直属の近衛騎士。謎多き男装の麗人。その正体はセシリアですら知らない。リヨナとは顔見知り。



Deamon Load -魔王-

職業：魔王
特技：闇魔法・ドラゴンプレス

大昔に伝説の勇者によって封印された暗黒邪竜。過去にリヨナの母を殺害している。現在の姿は仮の姿。



Camellia



Amare



Fiora



Cassis



Mai

※今回は欠場

彼女達の活躍は、ゲーム本編又は
先行CG集RQ-2018-2019にてお楽しみください。

✦ グロテシア大陸

作品の舞台となる大陸。かつて、魔王と呼ばれた邪竜によって厄災がもたらされ、滅亡の嬉々に瀕していたが、とある勇者の活躍によって邪竜は封印され、悠久の平穏を取り戻した歴史を持つ。それ以来、勇者の出身国であったフェイタリティア王国が大陸全体を統治し、およそ100年以上の間、大きな争いもなく平和な時代が続いていた。しかし近年、各地で再び魔物の活性化が報告されるようになり、巷では魔王が復活を果たしたのではないかという噂がまことしやかにささやかれている。出身地によって“グロテスタ大陸”と呼ぶ者もいるが意味は同じ。

✦ フェイタリティア王国

小国でありながら強大な騎士団を有し、大陸随一の軍事力を誇る選挙君主制の王国。リヨナの生まれ育ったホフラレ村は、王都の遠郊にある。現在の当主は女性で、元王国騎士だったが、武功を上げたことで国民投票により選出された。王配との間に二人の娘を儲けたが、長女であるセレスティアを病気により亡くしていたため、現在は次女であるマリアヌが第一王女となっている。軍事力以外にも、王立の魔導研究所を設立するなどして魔術の発展にも力を入れている。近年は魔王復活の噂を聞きつけた冒険者達が大陸中から押し寄せている。

✦ 王国騎士団

フェイタリティア王国が誇る騎士団。多くの優秀な魔法騎士たちが所属し、他国を圧倒する戦闘力で国の平和と均衡を守っている。武術と魔導の両立を掲げ、優秀な魔法騎士を育成する為の士官学校を国内に有し、優れた騎士の育成を実現している。現騎士団長のセシリアはこの士官学校を首席で修業しており、同じ時期にリヨナも在籍していた。魔物から国民を守るのも騎士団の努めであり、近年では魔物による被害が増加したことによって、過去にないほどに警戒の色を強めている。退魔の力を持つ歴代の勇者の末裔とは、常に協力関係を保っているようだ。

✦ 魔王軍

魔王が指揮する、人々の生活を脅かす魔物たちの総称。小さな村を襲撃したり、祠に侵入する冒険者たちの命を狙うなど、人類に危害をくわえる危険な存在である。なお、実際に軍隊として組織されているわけではないが、便宜上そう呼ばれている。魔王の封印以来長らく鳴りを潜めていたが、近年その動きが活発化しており、魔物による被害が大陸中で続出している。

✦ 封印の祠

かつて魔王と勇者が決戦を迎えた場所で、魔王を封印したことにちなみ“封印の祠”と呼ばれている。しかしその実態は広域に渡るダンジョンの総称であり、地底湖や森林地帯といった祠と繋がった別の区域も含まれるため、本来の意味での封印の祠はダンジョンの最深部に位置する魔王が潜伏している一画のことである。なお、未だその場所へ到達して帰還した者はいない。

✦ ロッテン教団

フェイタリティア王国の国教であり、大陸中の殆どの人が信仰している勇者教の教えを説く教団。大陸中に支部を持ち、その影響力はフェイタリティア王国以上とも言われている。数ある勇者教の宗派の中でもかなりの保守派の派閥で、「勇者は男性であるべき」という基本理念の元、女性勇者であるリヨナを失墜させるべく暗躍する過激派が教団内に存在している。過激派の目標はリヨナを捕まえ、男児を産ませた上で自分たちの操り人形となる勇者に育て上げることであり、目の前の国民の安全よりも、自分たちの信念を優先する異常性を持った集団といえる。女性勇者の待遇を巡っては女王とも水面下で対立しており、過去に第一王女であったセレスティアの暗殺が目論まれたのも、教団の差し金であった。その際に女王がセレスティアを延命させるために禁忌とされる古代魔法を用いたことを弱みとして握り、裏で国政を操ろうとしている。

✦ 近衛騎士団

フェイタリティア女王直属の近衛兵で結成された騎士団。女王の護衛を行うのが主な任務だが、女王の命により教団の悪行を暴くべく、秘密裏に監視と調査を行っている。近衛兵になれる者は国民の中でも限られており、士官学校に在籍している者の中から厳しい身辺審査を実施した上で選出され、修業と同時に近衛兵として再教育を受ける。身寄りのない孤児を国が引き取り、幼少期から近衛兵になるべく英才教育を受ける例もあり、ミラージュがそれにあたる。

✦ 魔法騎士

王国騎士団を構成する騎士たちの通称。魔法を駆使して戦う戦士のことであり、騎士でない者は魔法剣士などと呼ばれる。自身の身体に魔力を込めることで身の丈に合わない大きさの武器でも軽々と扱うことができるため、王国では男女を問わず魔法騎士に憧れる者が多い。そのため士官学校には大陸中から志の高い優れた人材が集まり、毎年優秀な騎士が誕生している。

✦ 冒険者ギルド

騎士団が赴くまでもない小さな問題から、大規模な捜索に向かないダンジョン内での魔物討伐など、様々な依頼を集め冒険者達に仕事として斡旋する会員制の組織。登録試験をパスすれば出身国を問わず入会できるため、魔王を討伐すべく大陸内外から冒険者が集まっている。近年では大陸の各地で新種の魔物が発見が多く報告されており、討伐依頼が殺到しているらしい。

✦ 召喚の祭壇

かつてこの世界と異世界とを繋ぐ儀式が行われていたという祭壇。封印の祠のどこかに存在しているといい、伝説の勇者がこの祭壇を用いて、魔王を打ち倒すための仲間を異世界より召喚したとされる。伝承によれば、いずれ魔王が力を取り戻した際には、その魔力を感知して異世界より、現代の勇者の力となる救世主を召喚する術式が仕掛けられているというが……？